

審査の結果の要旨

氏名 名西恵子

本研究は、母乳育児支援に役立てるために、母乳育児自己効力感を向上させる介入の効果および母乳育児自己効力感の測定方法を検証するため、以下の二つの研究目的をもってなされた。

(1) Bandura の理論に基づいた介入が、母乳育児自己効力感を向上させるかどうか、また、母乳率を上げるかどうかを検証する。

(2) Baby-Friendly Hospital ではない病院 (non-Baby-Friendly Hospitals: nBFH) において、退院時の母乳育児自己効力感スケール (Breastfeeding Self-Efficacy Scale-Short Form: BSES-SF) 得点によって産後 4 週および 12 週までの母乳育児中止を予測するためのカットオフ値を設定する。

以下のような結果を得ている。

(1) Bandura の理論に基づいた介入により、WHO/Unicef の推奨に基づいた授乳支援を行っている病院 (Baby-Friendly Hospitals: BFH) においては産後 4 週までの母乳育児自己効力感が向上し ($p = 0.037$)、また、介入群では対照群よりも産後 4 週まで母乳のみで育てている率が有意に高かった (AOR 2.32, 95%CI 1.01- 5.33)。しかし、nBFH においては、介入は母乳育児自己効力感 ($p = 0.982$) にも産後 4 週まで母乳のみで育てている率 (AOR 0.97, 95%CI 0.52- 1.81) にも影響しなかった。また、産後 12 週まで母乳のみで育てている率は BFH (AOR 0.71, 95%CI 0.36 - 1.41) においても nBFH (AOR 0.98, 95%CI 0.46- 2.07) においても両群に差がなかった。BFH では、糖水や人工乳による補足をせず母乳のみを与えることが通常で (81%)、生後すぐからの母子同室が多くの場合でなされていた (62%)。一方、nBFH では、補足をせずに母乳だけを与えていることはまれであり (8%)、また生後すぐからの母子同室はほとんどなされていなかった (3%)。

(2) BSES-SF 得点によって描いた ROC 曲線の曲線下面積は産後 4 週および 12 週までの母乳育児の中止に対して両方とも 0.74 であった。また、BSES-SF のカットオフ値を 50 点以下とした場合、nBFH における産後 4 週までの母乳育児を感度 79%、特異度 52% で予測でき、産後 12 週までの母乳育児を感度 77%、特異度 52% で予測できることがわかった。

以上、本論文は、Bandura の理論に基づいた介入は母乳育児自己効力感を向上させ、母乳率の向上させ得るものの、臨床現場で実施する際には、産科施設における授乳支援が予め適正化されている必要があることを初めて示唆した。さらに、退院時の BSES-SF 得点は、nBFH において早期の母乳育児中止を予測するのに有用であることが示唆し、予測に用いるカットオフ値は 50 点とすること初めて提案した。本論文は、母乳育児自己効力感の測定および母乳育児自己効力感に対する介入について、実際に即した状況で有用性を検証

した初めての論文であり、産科施設における有効な母乳育児支援の開発に重要な貢献をなすと考えられることから、学位の授与に値するものと考えられる。